8-1

應募川柳の選評

栃木県立図書館

栃木県立図書館
図書館之印

栃木県立図書館

前田タカ氏 寄贈

栃木県立図書館

の二句を書いてゐるので、句
の数としては三十七句を一寸超えてゐるやうですが、
ま、私の勘違いとして許すやうでありませう。さなかの時句が
かうやうであるとてよすまいが、
病者の安心とでもいふべきか、一
種の方が指句を連絡させる
れたものであるとてお思ひになつてか、
有事。
しかし、此点に於いて、私さうした句境
を許すやうなことも思はなよすが、

栃木県立図書館

す。

次に日立ては「お月」を詠んだ句で
ありますが、これは、その
そこにあるかたのでは、
ありますが、大体、
月、そこに紅葉を見たとかや、
紅葉の、紅葉つきでしょうか、
さう、ここに句にあるように
なお姫のお手紙を結ぶことか、野宮などで
うしたかとかやうなお月見のお供等

を詠つてゐる。それに近衛殿、西園寺殿
のものとして掲つてゐる。かうした
それは向きそれぞれお
あります之が、これまでを詠つてゐます
が詩歌の上ではそれ
ら、それぞれの句は「らしい」
るのの月並しかまだ
ひすが、なほ、さう
少々好きまるものの

ますと、これに次ぐ「結ぼほれ」を詠
んだものがあります。
結ぼほれつつ」などと言われは
れて詠まれますが、集
方面のことを詠んだものは
句の多くを詠んだ
之が、これよりも江山
ということを思想を、生き
意味によって詠まれ
ここで「結ぼほれ」
ほかの作者、

ように思います。

おもしろいのは、「社会」という言葉が、
それぞれに分類されるものの一つ一つであるにとどまる
ことです。

意味としては「社会」という言葉は

栃木県立図書館

処女作を発表して以来、十年を経ずして、すでに五冊の著書を出し、言わば文壇の一角に地歩を占めるようなことになりましたが、これ将来のおそれこそあるのであります。

従来、今回の集の内容に就いてくどくどしく申すことは、そのものの語るべきであるのでありまして、ただ一言だけ申しておきたいことがあります。今の言葉で申しますと、一人一人の詩人の詩であるのであります。今の言葉で申しますと、一人一人の詩人の詩であるのであります。

そこにこの集の意義は、すべて詩人の詩であるのであります。

ことの為に、この集を出すようなことをさえ甘んじて手を染めるに至ったのであります。

故郷の山河、父母、兄弟、妻子、友人、恩師、その他、私を取り巻く人々の上に、私は、今回の集の内容に就いてくどくどしく申すことは、そのものの語るべきであるのでありまして、ただ一言だけ申しておきたいことがあ

人をなぐることは許されないことである。しかしながら、我が子をなぐる人が、我が子を泳ぐことを教えるために、水の中へ投げ込んでいる人を見たら、私は、なぐる人よりも、投げる人よりも、泳ぐことを教えるために投げ込んでいる人の方を、悪い人だと思うかもしれません。しかしながら、私は、なぐる人よりも、投げる人よりも、泳ぐことを教えるために投げ込んでいる人の方を、悪い人だと思うかもしれません。しかしながら、私は、なぐる人よりも、投げる人よりも、泳ぐことを教えるために投げ込んでいる人の方を、悪い人だと思うかもしれません。

そこで、（　）の句を書きたいと思います。望むところは、現在私の置かれている境遇を離れて、全く自由の時にそこへ行きたいと思うことを望むからであります。私は、行きたいところへ行くことに私の全てを思うことを望むからであります。

そこで、（　）の句を書きたいと思います。望むところは、現在私の置かれている境遇を離れて、全く自由の時にそこへ行きたいと思うことを望むからであります。私は、行きたいところへ行くことに私の全てを思うことを望むからであります。

栃木県立図書館

「作品」十二句

赤田々おでは七一の風呂をたき

この句は「赤田々おでは」保科富枝

の為す。そのよって「赤田々おでは」は

そこに何も都合を期待しているのであ

ます。「は七一の風呂をたき」という

表現も作者の気持を持っているので、

ここにこの句は批評を持っている。

調、従来の「婦人」とは作者と読者の「なあ」と共感する所があります。古いとは思いますが、この句一つの形として、今始めての感じです。

掃き出すまでは外とも思ひ秋風

この作者は、秋風の「悪魔」という句に「悪魔出ぬかと掃いている」と共句保也見る

栃木県立図書館

時、そこにあるくらいの気持ちで来ます、作者からのお父様であります。

落ちている金もさまに言へゆき

「金もさまに言へ」鈴田清之輔

証拠のがあります、ことを言ふやいや、未の「さまに」が、時向の方なるものが合向のなるか、「金もさまに」の一まま違はさよおまかが、「金なと」な眠もくれず也ご言の方（ま）つくことのであよ

せう。落ちている金を向いく、この言ひおた落ちておる言であやまま。こいのところをれう十九言ふをエまさよ。面白い、とよあるそ人を打つ向かも言ふ事。注まやまあ毒みにみ

この「み」な「は」は「ま」毒山口此話之

今後はこの事で

栃木県立図書館

この句は「母のくちびる」ということばがあるように、「赤き」ということばがあるように、「赤き」ということばがあるように、「赤き

わしくに突たる山茶花紅葉

定義と似たれ子規の額と掛

いま一つその句を掲げ
初に「若くくりの椿中に言の宮れかあこ
とつる高谷の句かあ」ふかしん。ふなも力強

谷口二子 雪の芦

障子を通み

佐田光火

で、その高なつの句
あまま。

枯つこ花代のよさか枯つ彩

沖南 中川七吉

つくく枯つおつこ
ふまま。

定義かれ子ふ母であ

安子 田野岩森

「多色」 立句

雨雫に心雲の行く見えにけり

雨はれて立かう見えにけりと云ふ句なつて仕舞つて言ひ切つてはそれだけの事になつて仕舞ふ。すくつと見えたといふ句となれば説明を待つてはなるものゝ、見えにけりといふ、いろ〳〵なまがそこに想像されて来るのがなんと思ふ。

夜の雨に母かゝみをとぎてゐし

魚に（春の部）

午さき 鈴木茅村

春日は、女の部屋に思ひまゝにと云ふ句なつて居り、「女」と言ふ言葉よつて、女とそれのそこはかとなく、そこからも想像されるのであまつが、

「女の論争」では中
あるまい。こんな
方がよく、「まあ」と
はいえないまでも思う
来年つまらない
化事から始よ
なさま　藤田拝

今度の二手表現
なりのそれを代用
私でも多年
ようなことが
は「生芽のそのか
で作ります。しか
外今この場合の代用
のではなく、古い
ろくなものを決め
元」の年を記念

いってお客さまが、これは私のことであります。
ことを混ぜて使っておりますと話がありました。大
てもたくかうこの私のことをおっておられやうで、
私酔とか、酔癖とかいうよりこがら出て
おるのださうであります。ひよう私は酔
よき、酔癖は私のきよしびれるの意であまよ
す。だいたの私のきよいそれだけの事を目が
あるかどうかは存じません。イヤはなくこの
ごの私の生活が馬さまよって行ります。

〔二オ〕

〔ク〕

会議開始ごとに平沼 桐山幸幸
ごの「亜細亜」イクラ「現象」であります。「私
が、これは生月中に
ことをお承知ください。

〔七〕

栃木県立図書館

金ピカの夢は
あのおかあさんとか、
家なき子あたりの
名。しかし体
さう信じながら並
。一つの
ル、その
行かと思
も、夢
夢は我等犯罪者」
て見なければなりません。
（三）
若ぢさん、さうね
つか知ら、でも
「罪からか。さう、
ひろ子さんも思
弱の夢のかをつくれ

栃木県立図書館

栃木県立図書館

罫紙 (10×20)

罫紙 B4

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

規格 B4

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

〔朱引〕一本立句

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館